

考古・歴史・民俗の頭文字を取って考歴民（これみ）と名付けました。

### 神宮寺遺跡から星田旭遺跡へ

交野において神宮寺遺跡（早期）に続く縄文時代の遺跡が星田旭遺跡（中期）である、この二つ遺跡には、約5000年もの長い年月の隔りがある。

この間、交野が原に人が住んでることは十分に考えられるが、これまでその期間を埋める遺物や遺構は全く発見されていない。

このため両者の遺跡の結びつきについては今のところ全く不明であり将来の調査に期待するところである。

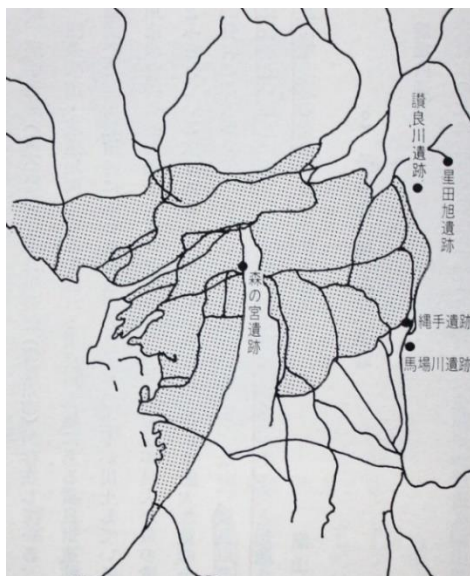
神宮寺遺跡から星田旭遺跡に至る間に、遺跡をとりまく自然環境は大きく変化を遂げる。

おおよそ今から1万年ほど前に地球の気温が上がって氷河期がとけ、その結果海面が上昇して、日本列島ができた。

大陸と地続きだった日本列島が海をはさんだ島国になった。

縄文時代の早期のころまでは、まだ現在よりも寒冷的な気候であり、海面も今よりは20㍍以上は低かったと推定されている。

しかし、その後気温が上昇するとともに、海面は上昇し、縄文時代前期には、河内平野の東は生駒山麓、南は八尾付近、北は枚方市の番田付近にまで海水が入り込んで河内湾を形成するようになる。



星田旭遺跡周辺の縄文時代遺跡

大谷橋から傍示川を上流へ約1キロばかりゆくと、  
なすびいし ぼって  
茄子石の谷と沸底の谷から落ちる谷川と、地獄谷の谷川とが一つに集まるところ、小字旭という両方の谷川に挟まれた麓の小さな台地、今は老人ホームが建っているところが、縄文時代の中期、今から四千年前人が住んでいた。もっとも海面が高かった。



星田縄文時代住居遺跡

明治41年に発見し、その後引き続き発掘、調査された。(片山長三氏)

この台地であれば、時としておこる山からの出水にも安全であり、濁水期でも流れの絶えない谷川の水を近くから得ることができる。

谷口であるために、山の幸、野の幸、すなわち狩猟や採集生活するにはまことに都合の良い場所である。

いまよりも1~2㍍ほど高くなったと推定されており、この頃は気温の上昇に伴いナウマンゾウなどの大型動物は姿を消していたが、それでもシカやイノシシなどはいたので狩猟が行われただろう。

また木の実の採集も行われ、川では魚をとって食べていたのではないかと推定されている。

ところでこの人たちの生活がどんな具合だったのか、どうしてわかるんだろう。



遺跡周辺図

遺跡地の広さは、東西 20 ㍍、南北 10 ㍍程度で、川面より約 2 ㍍高く、長い年月の間に山林或いは畑と移り変わり、地面は攪乱されていた。

恵まれた環境のもとで、星田旭遺跡の縄文人たちが、どのようなもの食べ、生活していたのかを裏付ける資料は遺跡からは全く検出されていない。

やや時代は下るが、当遺跡と河内湾を挟んで対岸上町台地の森ノ宮遺跡から出土した動物遺体は、河内湾周辺における縄文人たちの生活を知る上で貴重なデータを提供している。

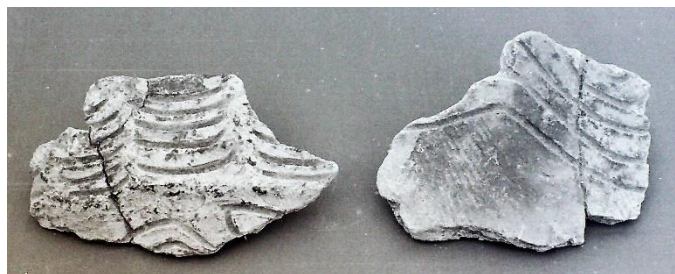
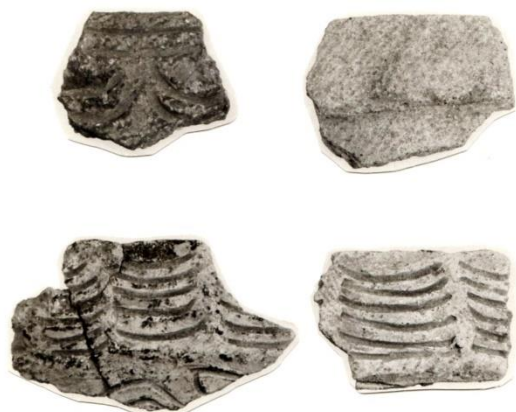


**旭遺跡出土品(交野町史)**

石鏃…すべて打製石、底部のえぐり赤い雁股式、主にサヌカイト かりまたしき

土器…厚手、黄褐色、黒みがかかったものもある。

- 1・へらがき沈線文 ちっかんもん
- 2・竹管文 あつもん
- 3・磨消縄文 まししょうじょうもん
- 4・隆起文 りゅうきもん
- 5・圧文 あつもん
- 6・条痕文 じょうこんもん



星田旭遺跡出土の土器

市内では中期の遺跡は今のところ確認されていないが周辺においては、河内湾に隣接した馬場川遺跡、縄手遺跡(東大阪市) 讃良川遺跡(寝屋川市)が存在している。

讃良川遺跡(寝屋川市)と星田旭遺跡との間は約3㍍ほどと比較的近い距離にあり、両者の遺跡の間には交流があったものと想像できる。

これを裏づけるためには唯一の方法はそこに落としていった人間の遺品をたどるよりないのである。

**その他の縄文時代遺跡**

焼垣内遺跡・・・出土した土器は縄文時代晩期に用いられた滋賀県里木式土器と同時期のものと推定される土器が、また石器の有舌尖頭器が採集されている。



さとしき 里木式土器



ゆうぜつせんとう 有舌尖頭器

交野市史「考古編」より

**焼畑耕作民文化と地名**

日本の農耕は、水稻一色ではなかった。

米食が普通化したのは、わずかここ数十年のことであるし、それまでに粟や稗、ソバなどの雑穀類が主食物として大きい比重を占めている地方が多かったのである。

そしてこれらの雑穀類は元来は焼畑耕作によって栽培されたものであった。

日本の各地で新年から春にかけて弓を射る神事が広く行われている

市内の焼垣内、的場という地名も何かを語ってくれているのか。

### 地名・焼垣内（やけがいと）

有池の西、石ヶ坪の北の池で、現在の青山三丁目にあたる。



石ヶ坪の地域は条理制がしかれて早くから開けたのであるが、焼垣内の地は北を流れる免除川が天井川となっているため、堤防がよく決壊して土砂を流出した。

そのため荒地として残されていた。

それが行殿の方から順次開墾が進んできて、焼垣内も畑、水田として開かれていったのであるが、夏になると日照りが続く、そうすると水の得にくいこの場所はすぐ作物が枯れてしまうといった栽培条件の非常に悪い土地であった。

それでも人々は必死にこの土地を守ってきたものである。

焼垣内の地名の裏には人々の努力と汗がしみこんでいる土地であった。

### 地名・的場(まとば)

住吉神社の南の段々状の水田になる。

寺では毎年正月八日に「お弓」という収穫を占う行事がある。

その的をこの田に立て、住吉神社の所から矢を射るのである。

的に矢が何本突き刺さるかで、その年の収穫の豊凶を占うのであろう。

的場は「お弓」の行事に使用される的を立てた場所を呼んでいる。



的場

神社境内から田に立てた的に弓を放つ

### みち

昔からシカはシカ、クマはクマ、イノシシはイノシシ、カモシカはかもしかみちなどと呼ぶ、それぞれ特有な路、<sup>けもの</sup>獣道があった。

したがってそれぞれのみちを追っていた。

みちは草が濡れ、やがて地肌をあらわした。

獣は四つ這いで小さいが、あとを追う人間の足は大きく地肌はだんだんかたまる。

植生の中には踏まれることに強く、踏まれることによって繁殖する種類もある。

人々のみちはオオバコやミチシバで覆われていった。

しかし、その路自体には、これがそうだとという証拠になるものはない。

唯一の方法はそこに落としていった人間の遺品をたどるよりないのである。

犬もあるけば棒にあたるというが、皆様も交野市内を歩くとき、注意して「下を向いて歩こう」遺跡を発見するかも・・・「ふるさと交野れきし散歩」より